ラグビーW杯2003
その二　flag & flaging

スコットランドは、過去に日本がメジャーに初めて勝って泣いて喜んだ相手です。

W杯第1戦。日本善戦。ある時点で「夢よもう一度」と期待しましたが、結局は駄目でしたが、flagという言葉を思い出しました。

先の試合で日本が勝って喜びを満喫していた矢先に、「日本の勝利はnegative rugbyから生まれた」と誌上に批評されました。一方スコットランドは「flagingが敗因」だといわれました。flagは旗という意味の言葉ですが、動詞としては「旗が風にたなびかずに垂れ下がっている」ことを意味します。あの試合、スコットランド調の縦横すっきりした試合運びがみられず、日本の防御が成功し、ずるずると時間が経過し、日本の勝利に終わりました。

今回も、ランキング9位のスキルと力強さが十二分に発揮されないままに、後半半ばまで進行しましたので、夢よもう一度と期待しました。が、結局はだめでした。必死で戦っている選手諸君には気の毒な言い方ですが、flagingな相手に今一度必死の勝負をしかけて打ち勝つ意識がなかったのが残念です。余力が無かったと言ってしまうには、あまりも惜しい機会であったと思います。旗は風にひらめいているのが通常ではなく、垂れ下がっているのが自然で普通の状態ということなのです。

flagについてもう一つ興味あることがありました。コーナーフラッグのflag postが旗のない柱になっているのに気付いた人も多いでしょう。コーナーフラッグに係わる歴史も伝統も、旗に触れたか触れなかったかの問題の方が大きく取り上げられたのです。

コーナーフラッグは、flagがあることが前提で、高さまで120cmと細かく規定されていました。corner flag post付近をdangerous zoneと呼んで、攻防の特別地域という認識のもとに、corner flagを目がけて走ることが攻撃の一つのセオリーとして使われました。グランドにあるべきものものがない空しさと寂しさを感じました。今日では当り前のことになっていますが、相撲の土俵角の4本柱が廃止されたときのことを思い出しました。

1971年現代ラグビー胎動期にルールも色々と研究されましたが。コーナーフラッグの文字はpost with flagで旗の着いた棒で旗がなくてはならないものでした。flagによる、should be indicated by a Flag即ち、旗が重要だったのです。

今日では、ルールではflag postになり、棒が核に考えられ、棒にぶつかることの危険防止に格別配慮され、ひらめく旗に触れた、触れないでもめるのを避けています。

グローバリゼーションと資材の発達が目覚ましい時代ですから、改革・進歩は自然なことで、その他幾つかの改正がありました。日本語版ルールブックとの違いに気付かれた人もあったでしょう。IRB LAW 第1条の変更に次のようなところがあります。

1～6項のものが、1.1～1.6に一連統一することにより、フィールドの総体感を前面にうちだしています。図も変更され、見易い、旗なし、寸法重視の図になっています。

The surface is grassが、should be grassになり、意味の通らない日本語訳が無くなるのは結構なことです。競技場の線はルールの意志がプレーに具現されるのを助け、ゲームが公平にスムースに行われるためのものです。そのための改正がなされています。以前は書かれていませんが、ハーフウェーラインや10m, 22mラインは全てゴールライン(lineではなくlinesです)に並行です。基準はゴールラインということです。長方形でない広場に区画する場合注意しなければなりません。

タッチラインから15mのdash-lineは従前の5ヶ所は改正ありませんが、ゴールラインから5mラインの内側へ1mではなく、ゴールラインから5mに改正されました。ゴールラインから「スタート」するということは、基準はゴールラインということです。図の改正明示に注意し、意図をいかさねばなりません。

ルール改正は、イコールコンディション、オープン展開、危険防止という基本精神・原則を守ってなされるのです。15mラインはオープンプレーを推し進めるものであり、ゴール前のプレーを整理するものです。ゴール前5mラインはスクラムをフィールドで組むことを確実にするもので、LAW 20条と整合するものです。タッチラインから5m並行ラインはゴールラインの5m手前で止まっています。LAW 19条と整合するものです。

2003.XX.XX

西川　義行